

【学会報告】

10th Korea-Japan Gerontologist Joint Meetingに参加して

森 秀一

東京都健康長寿医療センター研究所・老年病研究チーム・運動器医学

Korea-Japan Gerontologist Joint Meetingが2010 Spring Conference of the Korean Society for Gerontologyに連動して、2010年7月1日に韓国のDaejeon市のKRIBB (韓国生命工学研究院) において開催された。2001年から日本と韓国で交互に開催されている学会も、今年で10回目の節目を迎えるとのことである。今回、私は幸運にもその節目の本学会に参加し発表する機会を頂いた。私は日本側からの参加者10数名の中でもかなりの若手であり、多くの先輩研究者を前にして恐縮ではあるが、本稿では学会の様子を簡単に紹介する。

学会が開催されたDaejeonは、Seoulから韓国版新幹線であるKTX (Korean Train Express) に乗って約2時間の場所にある。93年に科学国際博覧会が開催されており、今回学会が開催されたKRIBBの他にもKAIST (韓国科学技術院) やETRI (韓国電子通信研究院) など政府・民間の研究所が100以上も集中しており、韓国の科学技術都市として知られている。私が数年前まで生活していた茨城・つくば市も似たような性格を持つ都市であるが、Daejeonは韓国でも5番目の大都市とのことであり、規模の上では格上であると感じた。

学会はKRIBBにある一つのホールで行われたが、会場内には大学院生と思われる若い方たちが多く参加していたのが印象に残った。1日のみの学会であったが、朝9時から夕方6時まで5つのセッション (I : Cellular response to oxidative stress, II : Aging research using transgenic animals, III : Nutritional and metabolic aging, IV : Caloric (or dietary) restriction and life span, V : Cell, tissue and body aging) に21の口頭発表が生まれ、さらに昼食の後には26編のポスター発表が入っており非常に濃密なものであった。韓国の現在の高齢化率は約1割程度であり、2割を超える日本と比較すると低い値ではあるが、約40年後には3割を超えると予想されており日本に匹敵する高齢化社会を迎えると考えられている。また、年長者を敬う儒教の思想も広く根付いているため、韓国社会にとって老年学・老化学というのは非常に関心の高い研究分野になりつつあるのかもしれない。口頭発表の持ち時間は20分

であったが、前述した関心の高さからか発表後の質疑応答が活発に行われたために時間超過することも度々あった。しかし、最終的にはほぼ予定時刻通りに学会が終了するところはchairpersonのファインプレーであろう。

私はセッションVのCell, tissue and body agingで発表した。最後から2番目の発表であり、海外での口頭発表が初めてという自分にとっては待たされる緊張はあまり良いものではなかった。私たちの研究チームでは老化による筋萎縮 (サルコペニア) を対象として研究を進めている。私の発表は、サルコペニアは体内環境の変化、筋や運動神経自身の変化だけで生じるのではなく、神経筋シナプスを介した維持システムの変化によっても誘導されるという新たな概念を提唱するものであった。自身の英語能力の貧弱さもあり、可能な限りシンプルなスライドと説明を心掛けたつもりだったが、参加者にどの程度内容を理解してもらえるか不安があった。しかし、発表後の質疑応答だけでなく、学会終了後に別会場で行われた懇親会においても参加者の方から発表内容に関しての質問・感想を頂くことができ、非常にうれしく感じた。また、韓国側のByung Pal Yu先生が私を含め全ての発表者に対して的確な質問やアドバイスを送っていたのも印象的であった。私が発表した神経筋シナプスは他の内容と比較してやや応用的な面もあり異質な感じもしたが、最近になって、加齢による神経筋シナプスの形態変化に酸化ストレスやカロリー制限が大いに関わっていることが報告されてきている。これらの詳細なメカニズムは未だ不明であり、今後も学会で他領域の知見を取り入れていく必要があることを実感した。

わずか1日のみの学会であったが、振り返るとかなり充実した内容であり、私にとって大変貴重な経験となった。日本と韓国の老化研究を発展させるためだけでなく、自身の英語でのプレゼン能力を鍛えるためにもこのような交流は必要であり、積極的に参加していくべきであると感じた。やはり「習うより、慣れる!」ということかもしれない。最後に、今回の学会でこのような機会を設けて頂いた先生方に心から感謝の意を表したい。